

かけはし

2015
Vol.70
July

「かけはし」は今回で70号を迎えました。一宮市国際交流協会では、現在約300名のボランティアが活躍しています。これからもわたしたちの活動を、あたたかく、末永く見守ってください！



一宮にもマツサンとエリーの

一宮市に暮らす国際結婚のご夫婦に、かけはし編集員がお話を聞きました。相手の文化を知ること。お互いや、周りの人を尊重する。相手を思いやる気持ちが基本のようです。ますます広がる国際化。どんな人も住みやすい街であり続けたいですね。

源：子どもは今年12月下旬に出産予定です。今は育児についてまだ何も言えませんが、ロアンは子どもの服について、私のお母さんが親戚からもらった服は使いたくないと言います。なぜ？

ロアン：鍋料理や野菜を作るとき、調味料（塩を含めて）は入れず、あとで何かをつけて食べる習慣があります、またレモン汁を使うことが多いです。源はそれに納得できないようです。なぜ？

二人が大切にしているのは、2月8日（交際がはじまった記念日）と、どんな小さいことでも、相手に対する意見を持つときは、いつでも話し合うこと。

「謝」（感謝と謝ること）を小まめに言うこと。

結婚式：中国、ベトナム、一宮で3回しました。



ロアン
(ベトナム)

げん
源
(中国)

家族への愛情表現がとても豊かで、子どもに対するスキンシップをしっかりする主人。日本人ならついそっけなくしてしまう場面でも、抱きしめて褒めたりするあたりの態度は見習いたいです。

休日も遊びに行く場所を選んで提案してくれます。

“子どもが熱を出した時に水風呂へ入れる習慣がある”などたくさんあった違いも、11年が経ち、何をあげていいのかわからないくらい慣れてきました。

結婚式：和装で写真だけ撮りました。



よこ
陽子
(日本)

ボラージュ
(ハンガリー)

日本の子どもたちは、あまり自分を表現しないと思います。「おはよう」とあいさつしても、ほとんど返事が返ってこなかったです。また、韓国では誰が来ても玄関先で帰すことなく、みな家の中に招くので、子どもの友達にも「遊びに来て」とよく言っていました。初めはなかなか来てくれませんでした。韓国では見た目も大切に、参観日などママたちは、きれいにお洒落をして出かけます。日本のママは普段着で来ているので驚きました。このように違いもありましたが、一宮に暮らし約20年。3人の子ども、両親の7人家族。年7回の誕生日には、はりきります。家族からは「お母さんには、お父さんしかいないね」と言われています。

結婚式：教会で合同結婚式



こうじ
浩嗣
(日本)

ミョンオク
(韓国)

ようなご夫婦がいっぱいます♡

“フィリピンの文化が新鮮！” “日本人にはない、いろいろ多様な考え方があることを知った！”

思いもつかない考え方があることに驚かされるのが国際結婚の良かったことです。フィリピン語での電話中に日本語が飛び出すくらい、^{りゆうちよう}流暢に日本語を話すマエリンさん。一見ごく普通の日本人家庭のようです。でもビサヤ語、タガログ語、英語、日本語を聞きながら育つお子さんは将来、国際人まちがいなしですね。



マエリン
(フィリピン)

^{しゅん}俊
(日本)



モルバン
(フランス)

^{あや}文
(日本)

モルバンさんは現代美術作家として、文さんは写真家として作品を発表しているので、何かを表現するという点に関して、二人で意見を出し合えることがうれしいそうです。それ以外でも、例えば家事も「できる人がやろう」という考え方で、二人で協力しながら日々を送っています。ときどき彼は腕をふるい、美味しい料理をワインと共に食卓に並べてくれるのだとか。国際結婚の夫婦円満の秘訣は「よく話し合うこと」。

結婚式：日本の神社で



^{みゆ}美有
(日本)

サルヴァトーレ
(イタリア)

音楽家（ピアニスト&バイオリニスト）のお二人。共通の世界を持つおかげで国の違いは気になりません。5年もの遠距離恋愛を経て、昨年9月にご主人の故郷シチリア島で結婚。一緒に暮らせることが幸せ！おいしいイタリア料理を作ってくれるご主人。大切にしているのはローマ法王の「どんなにけんかをしても夜寝る前には仲直りをしよう」という言葉です。結婚式：イタリアの教会で

ジャックリン：チキンティッカマサラはイギリス発祥のインド料理、いわゆるカレーだということを主人と出会って初めて知りました。自国のニュージーランドがイギリスの植民地だったのに、食文化は少し違います。イギリス人が辛い料理が大好きということを知ってびっくりしました。

スティーブン：奥さんがほとんど毎朝トーストにマーマイトという食品をぬって食べていること。今は僕も好きになりましたが、最初はびっくりしました。国際結婚の夫婦円満には、柔軟性が大切です。頑固な態度をとることは結婚の進歩の障害となると思っています。

※マーマイト(Marmite)はビールの醸造過程で最後に沈殿した酵母で、ビタミンBを多く含む食品。

結婚式：NZ・クライストチャーチで



スティーブン
(イギリス)

ジャックリン
(ニュージーランド)

ありがとう青年の家～笑顔でさようなら～ ヤングフェスティバル

青年の家が3月31日をもって閉館となりました。

これまでそこで活動してきた茶華道サークルや劇団、そして国際交流協会の日本語ひろばなどのグループが、青年の家では最後となる「ヤングフェスティバル」を盛り上げました。(日野)



ベトナムのぼうしはどう?

世界のお菓子はいかが?



雨の日でしたが、建物の中は熱気でいっぱい。

1階の調理室では国際交流協会によるそば打ち体験。子どもたちが一生けん命そば粉と格闘していました。

2階の特設ステージでは、楽しい司会とともに、日本語ひろばで学ぶ人たちが、母国の歌や、覚えた日本語の歌を披露したり、ギターの演奏をしてくれました。

4階のブースでは、「世界のおそび・クラフト体験」として、ベトナムの帽子「ノンラー」や、手足の動くピノッキオの紙人形を作ったり、豚の足という中国の折り紙遊びを紹介。また、協会のボランティアによる手作りの「ごま団子」やイギリスの「スコーン」、ベトナムの「ケオラック」という豆菓子の販売もありました。

さらに国際交流協会以外のグループのイベントもいろいろ。玄関前でのもちつき体験、和室でのお抹茶体験、その他クイズラリーやバルーンアートなどもあり、盛りだくさんな催しに、遊びに来た外国人や子どもたちは大忙しであちこちまわって楽しんでいました。

てまえ
お点前を
いただきます



もちつきは
呼吸が大事



ギターは
独学です



カラオケは
得意です



そば粉をコネコネ
まとまるまでが
たいへん



わたしの常識、あなたの非常識？

イタリア出身の国際交流員ヴァレンティーナさんによる、小学校高学年から中学生を対象にしたセミナーが2日間に分けて開催されました。

初日は簡単な自己紹介ゲームで緊張をほぐしたあと、「バーンガ」というシミュレーションゲームを行ない、多文化社会や異文化社会の状況を体感しました。

ヴァレンティーナさんから、常識とは「一般的に真実と思われていること」「社会の人々が作った、誰でも知っているルール」との説明がありました。とは言ってもやはり言葉では難しいので、〇×クイズを通じて子どもたちにもわかりやすく話してくれました。各国の色々な常識クイズが紹介され、「アメリカでは学校の掃除は誰がする？」の答えが「管理人さん」と知らされると、子どもたちからは「いいな～」の声があがりました。また「スイス人が話す言葉は？」の答えは、「スイス語というものはなく、地域によって話す言葉が違う」。これにも「え～」と、びっくりの様子でした。

中には日本国内に関するクイズも。「富山県の横断歩道に置いてあるものは？」の答えは「雪かき用のスコップ」、「長崎県ではお盆のときにお墓の前で何をやる？」の答えは「花火」でした。もしかしたら大人でも知らない人が多いのではないのでしょうか。この日は「それぞれの国や地方にそれぞれの常識があり、正しい、正しくないではなく、お互いに理解し合うことが大切」ということを学びました。

2日目はイタリアの「食事の常識」を体験。はじめに食べ物についての紹介がありましたが、チーズは約450種類もあり、日本のように単に「チ

ーズ」と呼ぶことはなく、その種類の名前で呼ぶのが常識だそうです。同様にパスタも種類が多く、ソースとの組み合わせが大事とのこと。

また、食事の順番に合わせた食器の並べ方や、「パスタは音を立てて食べない」、「お皿を手で持って食べない」など、日本とは異なるマナーも学びました。

そのあとは料理ボランティアの手助けを借りながら、イタリアの家庭料理づくりに挑戦。「かぼちゃを切る人は？」「ズッキーニをくり抜く人は？」「はい！」「私がやる！」と積極的に協力しあい、はじめはぎこちなかった手つきが、終わりごろにはすっかり余裕も出てきて、楽しく料理づくりを体験することができました。なお、イタリア料理は調味料をできるだけシンプルにして、素材の味を引き出すのがコツなのだそう。

料理ができあがったところで、ヴァレンティーナさんから「さあ、食器を並べましょう！」とかけ声がかかると、覚えてたのイタリア流テーブルマナーにしたがってお皿、コップ、スプーン等をきれいに並べました。最後にみんなで「ボン・アッペティート！（いただきます）」と元気な声で言い、できたての料理を味わいました。

楽しい料理づくりとおいしい食事を通じてイタリアの常識を学ぶことができ、満腹と満足な笑顔でセミナーは終わりました。(akeharu)



国際理解セミナー

「外の人」と「こっちの人」の多文化共生



尾西生涯学習センター 2.21

昨年8月に一宮市に就任した国際交流員ロザンナさんが、「ニュージーランドと日本の外国人に対する接し方や考え方の違いを、いろいろ比べることによって多文化共生を考える」ことをテーマに、初めての国際理解セミナーを開催しました。



タイトルを「外の人」と「こっちの人」にした理由は、日本では外国から来た人は「内の人」や「中の人」にはなることができて、「こっちの人」になる（仲間に入る）のは難しいという、ロザンナさんの実感からだそうです。

まず自己紹介では、日本人は出身地や職業のことに中心に話をしますが、ロザンナさんは「今の自分の状態を述べることだ」といいます。「私はロザンナと申します。一宮市のニュージーランド国際交流員です。市内の小中学校を訪問してニュージーランドのことを教えたり、市の業務に必要な翻訳や通訳をしたり、びさいまつりなどのイベントに出たり、いろいろやっています」といわれました。

よく「なにじんですか？」と聞かれますが、その言葉はニュージーランドではほとんど使わないそうです。両親や祖父母が、いろんな国にルーツを持っていることが多いからです。ロザンナさんの考えでは、「なにじん」

ということは個人が自由に考えればよく、ニュージーランドでは誰が「なにじん」かは、わからなくてもよいという雰囲気なんだそうです。

つぎに「多文化共生」という言葉は、日本では「外国人と共に生きる」という意味で使われますが、ニュージーランドでは「外国人や人種の区別なく、共に生きている」という状況で、このことによって平等な社会がつけられているといえます。ちなみにニュージーランドの住民のうち、およそ4分の1が外国から来てニュージーランド国籍を取得した人たちだそうです。



また、外国から移住してニュージーランドの社会にとけ込んだとしても、移住前に持っていた自分の文化や伝統をしっかり大切に、その習慣を続けるべきだとも考えています。それがニュージーランドの文化だということです。

全体を通して感じたことは、ロザンナさんはその生き立ちや国柄から、「個人」として日本人に接しようとしているのに対し、日本人は“外国人”ロザンナと意識して接しようとするということです。

それにしても、2時間の講座用スライドと10ページ以上の原稿をゼロから作り上げたその情熱には、本当に頭が下がりました。ますます一宮での活躍が期待されます。（橋本）





平成26年度ボランティア交流会は おいしい「お・も・て・な・し」で始まりました！

青年の家 2.1

年に一度、一宮市国際交流協会（iia）のボランティアの全グループが集まり、一年間を振り返る交流会が開かれます。今年もたくさんのボランティアのみなさんが駆けつけてくれました。

ボランティア“交流会”の名前のおとおり、かた苦しい会議ではなく、他のボランティアグループのみなさんとのコミュニケーションが大きな目的であり、楽しみとなっています。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
交流会はクッキンググループによる手作り料理を囲んでの立食パーティーで幕を開けます。今年にはアジアンカレー、サフランライス、スペイン風オムレツ、チヂミ、イタリア野菜のサラダ、杏仁豆腐と、国際交流協会らしくバラエティに富んだメニューがテーブルに並びました。



iiaのイベントではクッキンググループのお世話になることが多く、いつも頭が下がる思いでおいしい「おもてなし」を受けています。

お腹が満たされたあとは、特別ゲストとしてお呼びした「一日一組限定博多もつ鍋屋」の社長 山中誠さんに、「プロフェッショナルに学ぶ究極のおもてなし精神」というテーマでお話をいただきました。

ラジオ番組も持つ山中さんの歯^{きぬき}に衣着せぬ話しぶりはとてもエネルギーで、会場は何度も笑いに包まれました。

山中さんの講演のお次は、各グループのメンバー紹介と活動報告。iiaのボランティアは、ホームステイ、通信連絡、日本語ひろば（いちのみや・びさい・ジュニア）、通訳翻訳、イベント、クッキング、ニュースの各グループにわかれて活動しています。（かけはしを作っている私たちはニュースグループです！）



イベントなどでたまに見かけるボランティア仲間顔を見ながら、それぞれの活動報告に耳を傾けていると、会話を交わしたことのない相手でも自然と親近感がわいてくるのが不思議ですね。

最後は事務局から新年度の事業計画の説明と、国際交流員のロザンナさん、ヴァレンティーナさんからも自身が企画したイベントの紹介や意気込みが語られ、交流会は無事閉幕となりました。

（you 都市）



地球あっちこっち

迷わずロサンゼルスに飛び立って

よこい かなえ
横井 香菜重



パウエル図書館(UCLA)

2007年に高校を卒業して渡米し、カリフォルニア州ロサンゼルス近郊に5年ほど住んでいました。はじめは語学学校に3ヶ月間通い、その後コミュニティカレッジを経て、4年制大学に編入しました。

渡米して半年ほどはホームステイで過ごしました。しかし、私が想像していたイメージと現実とは大きく異なり、とても大変な経験をしました。すべてではありませんが、ホームステイの受け入れをしている家庭の多くはホームステイを収入源として考え、とてもシビアです。洗濯の回数や電気の消灯にも厳しいです。食事も家族みんなで集まって食卓を囲むことは稀で、夕飯にファストフードを出されることがよくあり、時には何も用意されていないこともありました。また、ホストの家庭問題に巻き込まれ、急に出て行ってほしいと言われたこともあります。ホストファミリーというときと白人を思い浮かべる方も多いと思いますが、ホストの国籍は千差万別で、移民してきた家庭の割合も非常に多いです。半年間にしたホームステイ4軒のうち3家庭はポーランド、フィリピン、インドネシアからの移民でした。ホームステイには現地の生活習慣を体験できるというメリットもありますが、ステイ先の家庭事情もさまざまということを心に留めておく必要があります。

最初に少しマイナスイメージを書きましたが、様々な国籍の人が共存する「人種のるつぼ」ロサンゼルスは、面白くて刺激的な街です。ふだんから多様な文化に身近に触れ合うことができます。チャイナタウン、コリアタウン、タイタウンなどそれぞれの食文化を堪能できるのも魅力です。

日系スーパーも充実していて、日本語の携帯電話、不動産、旅行会社などのサービスもあります。日本と同じような生活ができるので、日本人にとって住みやすい環境といえます。逆に言えば自分で意識して努力しない限り、英語を習得したり、現地の文化を学ぶことはできません。これは他の移民の方にもいえることで、実際にアメリカに10年、20年住んでいてもあまり英語が話せない人がとても多くいます。

大学に関しては、やはりついていくのが大変で、毎晩夜遅くまで勉強しました。講義以外にもディスカッションという20名前後のクラスがあり、自分の意見を発言しなければいけないので、慣れないうちは抵抗がありました。大学生活そのものは楽しかったです。とくに私が通ったUCLAはビバリーヒルズ、ハリウッド、サンタモニカビーチといった観光地に近く、いろいろなエンターテイメントやアクティビティを堪能できました。



若者に人気のマンハッタンビーチ

編集後記

冷水がおいしい季節の到来です。熱い真夏の日差しを身に受けて、吹き出す汗を拭いて歩く。ああ、早くのどを潤したい。仕事帰りはいつもこうです。家の玄関を颯爽とくぐり、冷気を浴びて作り置きの麦茶を手にとった。透明のグラスを薄く濁し、カランカランと氷を3つ。一気にグーッと飲み干すのが最高にいい。湧水をふんだんに使った水まんじゅうも手元に置こう。涼しい贅沢はいかがですか？ (Riku)

発行 一宮市国際交流協会 (〒491-8501 一宮市本町2-5-6 一宮市生涯学習課内)

ご意見・ご感想お待ちしております 【TEL: 0586-85-7076 E-mail: iia-138@iia-138.jp】

当協会に関する情報はウェブサイト・Facebookページもご覧ください

【WEB: <http://www.iia-138.jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/iia138/>】

*この「かけはし」は、協会ボランティアにより取材・編集されています。

みなさんも国際交流協会親善ボランティアに参加しませんか？お気軽にお問い合わせください。